

大阪は「まち」がほんまにおもしろい

そこは御堂さんの鐘の音が聞こえるところ

～船場の中核・本町を歩きながら～

江戸時代には船場商人は「御堂さんの鐘の音が鳴るところに店を構えること」が悲願で、それが成功のステータスでした。その名残りで「東洋のマンチェスター」と呼ばれた大坂の基幹産業だった「糸偏」の本社などが現在も随所に見られます。船場の中核に位置する本町を歩いて、偉大なる大阪企業家の足跡を辿っていきましょう。



② 陶器神社・繊維神社

坐摩神社の境内社です。坐摩神社が船場へ遷座すると、船場の中心地ということで多くの物売りが門前に集まりました。とくに古着屋は「坐摩の前の古手屋」として名高く、上方落語「古手買」「壺算」にも登場しています。ここから「ごぞう」が古手屋として誕生して、船場が繊維の町として発展するきっかけにもなりました。また西横堀川沿いや唐物町には陶器問屋が並びました。繊維神社、陶器神社はその名残です。

③ 渡辺

坐摩神社の地名は「渡辺」と称します。かつての遷座地名が移されたもので、日本全国の渡辺・渡部等の姓の発祥地です。かつては辺り一帯を渡辺町といいましたが、昭和63年(1988)に旧南区・東区の統合で町名変更されそうになり、渡辺姓の末裔の「全国渡辺会」が反対運動を起こして「久太郎町4丁目渡辺」という地名で決着しました。

④ 南御堂

正式には真宗大谷派難波別院といいます。文禄4年(1595)に秀吉から寺地を寄進され、本願寺第12代・教如上人(1558～1614)が大坂・渡辺の地に大谷本願寺を建立。その後、慶長3年(1598)に現在地へ移転しました。慶長7年(1602)に家康から京都烏丸六条に寺地を寄進されて寺基を移すまで、当寺は本願寺教団の実質上の総本山でした。正徳4年(1714)には幕府から大坂城の石垣を寄進され、現在でも敷地南側で石垣を見ることができます(黒く焦げた石は大坂空襲で焼けたものです)。大阪市内の中心を南北に走る御堂筋は、北御堂(本願寺津村別院)と南御堂を繋ぐ道であることに由来しています。

⑤ 大谷本願寺銘梵鐘

教如上人が大谷本願寺を創建したさいに、文禄5年(1596)に鑄造した大谷本願寺銘の梵鐘です。船場の中心地にある南御堂の梵鐘は商都のシンボルで、「御堂さんの屋根の見える所で、鐘の聞こえる所で暖簾を張るのが夢や」と船場商人の憧れでした。

⑥ 芭蕉辞世の句碑

元禄7年(1694)に俳聖・松尾芭蕉が大坂へやってきましたが、体調を崩して南御堂近くの花屋に左衛門の貸座敷にて客死しました。南御堂には芭蕉の辞世句のひとつ「旅に病で ゆめは枯野を かけまはる」を刻んだ句碑が建てられています。毎年11月には芭蕉忌が開かれ、多くの参加者が足を運んでいます。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内) 「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または「大阪あそ歩」でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。

① 坐摩神社

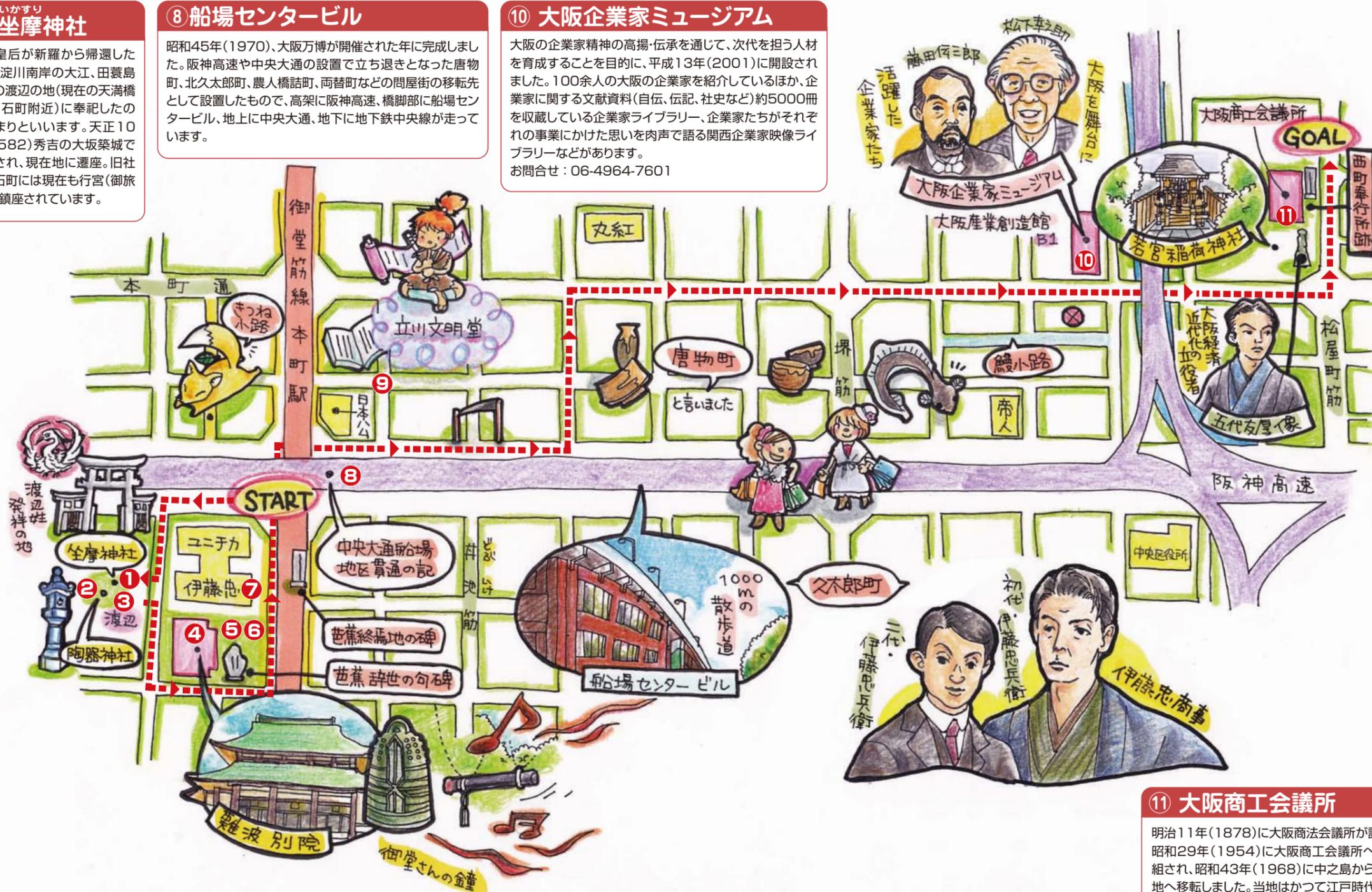
神功皇后が新羅から帰還したさい、淀川南岸の大江、田蓑島のちの渡辺の地(現在の天満橋西方、石町附近)に奉祀したのが始まりといえます。天正10年(1582)秀吉の大坂築城で替地され、現在地に遷座。旧社地の石町には現在も行宮(御旅所)が鎮座されています。

⑧ 船場センタービル

昭和45年(1970)、大阪万博が開催された年に完成しました。阪神高速や中央大通の設置で立ち退きとなった唐物町、北久太郎町、農人橋詰町、両替町などの問屋街の移転先として設置したもので、高架に阪神高速、橋脚部に船場センタービル、地上に中央大通、地下に地下鉄中央線が走っています。

⑩ 大阪企業家ミュージアム

大阪の企業家精神の高揚・伝承を通じて、次代を担う人材を育成することを目的に、平成13年(2001)に開設されました。100余人の大阪の企業家を紹介しているほか、企業家に関する文献資料(自伝、伝記、社史など)約5000冊を収蔵している企業家ライブラリー、企業家たちがそれぞれの事業にかけた思いを肉声で語る関西企業家映像ライブラリーなどがあります。お問合せ: 06-4964-7601



⑦ 伊藤忠

安政5年(1858)、初代伊藤忠兵衛が麻布の行商として創業。忠兵衛は大坂から九州・長崎にまで足を伸ばし、このとき福岡の万行寺住職・七里和上から仏の教えを諭され、「商売は菩薩の業」と行商に精進したといえます。明治5年(1872)に本町2丁目に呉服太物商「紅志」を創立。当時、呉服問屋といえば伏見町でしたが、忠兵衛は御堂さんに近く地価も安い本町に本拠を置きました。開店と同時に店法を定め、会議制度の導入や高等教育を受けた学卒社員の採用、保険制度の適用といった画期的な試みを次々と実施し、旧弊な商慣習を色濃く残す船場商人を驚かせました。また「一六」と称して、1と6がつく日の月6回、全店員参加の無礼講のスキヤキ会を催し、忠兵衛も酒を酌み交わしたといえます。現在は世界70数ヶ国に約150以上の拠点をもち、三菱商事、三井物産、住友商事、丸紅と並ぶ日本の五大商社のひとつです。

⑨ 立川文明堂(立川文庫)

かつて心齋橋筋の唐物町を西へ入ったところに立川文明堂がありました。創業者は立川熊次郎といい、明治11年(1878)、兵庫県摂東郡宮田村の農家出身です。裕福な家庭でしたが父が堂島米相場に失敗して熊次郎は大坂に奉公へ。その後、明治37年(1904)、立川文明堂を創業しました。熊次郎は本願寺8世の蓮如上人の教えに深く帰依していて、上人が活躍した文明年間(1469～87)を店名としました。講釈師・玉田玉秀齋や作家の山田阿鉄、唯夫兄弟らと手を組んで講談本『岩見重太郎』『宮本武蔵』『一休禅師』『水戸黄門』『大石内蔵助』『荒木又右衛門』を出版。やがて西遊記に着想を得た『猿飛佐助』を出すと、なんと100万部の大ベストセラーに。古本+3銭で新本と交換するシステムも取り入れて、一躍、立川文庫ブームが巻き起こりました。急成長した反動と作家不足から立川文庫そのものはマンネリ化してしまい、大正末期に人気は下降しますが、後々の大衆文学や時代劇に多大な影響を与えました。湯川秀樹、川端康成、大岡昇平、松本清張なども少年時代に立川文庫のファンだったことを表明しています。

⑪ 大阪商工会議所

明治11年(1878)に大阪商法会議所が設立。昭和29年(1954)に大阪商工会議所へと改組され、昭和43年(1968)に中之島から現在地へ移転しました。当地はかつて江戸時代には西町奉行所で、明治になると初代大阪府庁に。その府庁も明治7年(1874)に江之子島へ移り、跡地は大阪博物館(動物園・美術館・図書館)として賑わいました。場長には豪商・千草屋7代目主人で「最後の粋人」と呼ばれた平瀬露香が務め、収集した書画、茶道具、蒔絵などを展示して大阪市民に喜ばれたといえます。隣には若宮商工稲荷神社があり、神社前には大阪商工会議所の初代会頭・五代友厚、7代会頭・土居通夫、10代会頭・稲畑勝太郎の銅像が並んでいます。